

なお、壮図を抱いて此の春を迎う

松山義則



卒業生のみなさん。ご卒業おめでとう存じます。同志社大学、女子大学にご入学になってから学生生活もつかの間にすぎさりました。同志社における青春時代はお一人お一人にとってかけがえない貴重なときであったと思います。いま、その学生生活を土台としてそれぞれ社会に向って門出されることとなりました。

わが国はいままでにない好景気となり、就職も好調の年であつたと思います。かつての時代と比較して生活水準も格段の高さであり、よく言われるように豊かな時代、個性化した時代になっています。しかしそのためにいろいろな問題も生じています。実際に豊かさがあるのか、社会的格差の拡大、また利害の対立の深刻化も無視できません。ことに世界の政治的、地球環境的状况はいままでの歴史にはまれなほどの急速の変化と激動のなかにあります。その将来の予測については、いろいろな角度から多様な要因をつみあげて、試論されてはいますが、

その適中の確度についてはまことにむずかしく不透明さをましているといわねばなりません。それだけにみなさんがこれから直面される職場や社会的状況はきびしく、自己の生活設計や生涯かけての人生計画の実現は容易ではないと思います。

われわれは日常的な日日の生活のなかで、明日の日がかならず来るものと当然に考えてその日その日をすごしています。自分と自分をとりまく世界とが永遠に持続するもの、無限なるものと考えがちです。そしてそのなかに人生の多くの設計を夢みています。立志伝中の成功者、偉人の生き方を見習い自分もその道を歩もうと努力することもあります。人に倍加する自信をもち、強烈なほどに自己主張をし、凡庸さを拒否して個性的独創的に強靱に実行する人物として生きることの一つの道であります。競争社会では尋常な生き方では頭角をあらわすことはできないでしょう。努力と忍耐、活力ある行動性なしには社会のなかで勝利者とはなり得ないと思います。しかしまた、人間は誰でも、明日の日はわからないこと、自分も世界もいつかは消え去ること、有限であることを知っています。その知り方が浅いか深いか、なげやりか真剣かはその人やそのときの事情によつて異なるでしょう。人間が根源的に有限であり「死への存在」であることは否定できないことであります。

紀元前一〇〇〇年たらず以前、ダビデの子ソロモンは知恵ある人であり、イスラエル帝国を統合し、権力と虚栄とをほしいままにした王者であり勝利者でありました。聖書には「百合を思ひ見よ。つむがず、織らざるなり。されどわれなんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだにそのよそほひこの花の一つにもかざりき。今日ありて明日爐になげ入れらるる野の草をも、神はかく装ひたまへば、ましてなんぢらをや」とあります。野の草、百合の花の美しさには、栄華をほしいままにして栄与にあふれた王ソロモンでさえ全く及ぶものではないと教えられています。風にそよぐ野の草、

そしてその運命は明日たおられて爐になげ込まれる短命の有限の生命でしかないものに神はこの世の権力者ソロモンをはるかにこえた貴さをあたえて下さっているというのです。そしてこの智恵と權威にあるれるソロモンも死にうちかつことはできない有限な人間でありました。しかも、神は野の草を美しくされた以上に、まことの心をもつてへりくだって神のもとに集る人たちをかえりみて下さると教えられているのです。人間は自分の欲望の実現を追い、そのために他人をおとし入れあるいは他人を利用し、そして優位に立ち競争の勝利者になろうという意図で行動しがちです。人類の歴史のところどころも、また世界のなかの人びとの集るところにはいたるところで争いがあり、憎しみがあがり怒りがあります。そして戦争とそれにとまなう悲惨な状況がくりかえし生じています。わたくしたちの周囲にも人間のとげとげしい争いが見られます。これから旅立たれる社会にはみなさんにとつてまことに酷しい現実がまぢかまえていると思います。

たまたま今年は、同志社の創立者新島襄先生が永眠されてから一〇〇年になります。一八九〇年一月二十三日、先生は神奈川県大磯の旅館で病を養っていましたが、そこで天に召されました。四十六歳十一カ月でありました。病身の先生が同志社大学設立のための募金活動とキリスト教伝道のため東上中のできごとでありました。若き幕臣であつた先生はわが国の将来を憂い、日本が世界の中の国として成長するにはキリスト教精神に生きる人物の養成にあると確信したのです。そして「一國を組織する教育あり智識あり品行ある人物」を養成することを念願しました。そして同志社においてこれらの人人が個性にあふれ潑刺として成長することを願われました。先生が病床でむかえられた元旦の詩は「歳を送りて悲しむをやめよ病羸の身、鶏鳴早く已に佳辰を報ず。劣才たとえ済民の策に乏しくとも、なお壯図を抱いて此の春を迎う。」でありました。三週間のうちにこの世を去る

という重篤の身をやしない、また自らを劣才とよぶ謙虚な思いをこめて、勇壮な意欲に生きぬかれた先生のたくましい精神にふれる思いがします。

卒業生のみなさんはこの春から、それぞれの人生を歩み出されます。数かぎりない問題に直面され、きびしい状況の前にたたずまれることも何度となくあると思います。人びとに理解されることなく、孤独の道を歩まれることもしばしばあることでしょう。このようなときに、新島襄先生の「なお壯図を抱いて此の春を迎う」という気概、勇気ある精神を思い出して下さい。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」という聖句はわたくしたちが思いなやみ苦しみのどん底にほり込まれたときに、あたたかい慰め、よろこびと希望とをあたえてくれます。不思議な有限の人生にあつて、人と人との相克のなかに疲れはてたとき、この聖句は明るさとあふれ出る活力とを回復させてくれるでしょう。この苦しい争いの世にあつて、互にはげましあい、思いを一つにするときに、愛と平和の神がともにいて下さると思います。卒業生のみなさんが元気でその人生を歩み通されるよう心から祈ります。

(同志社総長)

岸に向かつて漕ぐ手をゆるめるな

笹田友三郎



やわらかな春の日ざしのなかで、一九八九年度同志社大学卒業式を迎えることになりました。新しく誕生したばかりの学士と修士の諸君に、心からお祝いを申しあげます。

諸君が本学に入学されたのは一九八六年、田辺キャンパスの開校の年でした。入学後の二年間を新しいキャンパスで過ごした諸君は、田辺キャンパス入学のいわば最初の卒業生ということになります。諸君が学生生活を送ったこの四年間に世界にはいくつかの大きな出来事がありました。とりわけ昨年来の東ヨーロッパの激変は、世界がいま歴史の転接点に立っていることを物語っております。一九九〇年という年は卒業の年であるとともに、こうした感慨を交え、諸君にとって忘れることのできない年になるでしょう。

ご承知のように、社会主義国家は今世紀の産物であります。象徴的に一九一七年のロシア革命が

もたらしたのですが、それから七十年。いま社会主義のシステム全体が異議の申し立てを受けることになろうとは、誰が予想しえたでしょうか。世紀末の時はそれほど急速に流れております。

ベルリンの壁の崩壊は、経済問題が大きく与っていることは否定できません。何ごとによらず、なだれ現象というのは不気味なものです。結論を急ぐことは慎むべきでしょうが、それを目のあたりにすれば、社会主義の敗北を口にする人がいても不思議ではありません。果して、資本主義は勝ったのでしょうか。生産効率では自由競争が優位を占めていたことはたしかです。しかし、経済の活性化につながる競争の原理を社会生活全般におよぼし、効率のみを追求しておりますと、公正が損われることになります。資本主義と社会主義と、そのどちらにも得失があり限界があります。

明白にいえることは、資本主義であれ社会主義であれ、もはやイデオロギーによる統治は不可能だということであります。イデオロギーのしがらみを引きずっていた時代は終わりを告げました。ロシア革命から六年の後、ある宗教哲学者が語った言葉がいま痛切に心に響いてまいります。

「国家が経済を支配しようと、あるいは経済が国家に権威を与えようと、両者にとりたてて変化がないならば、それは重大な事柄ではない。しかし国家の制度が以前よりさらに自由となり、経済がいつそう公正となるならば、重大な問題であろう」。「重大なことは、……人間の社会生活のなかにまき散らされた精神が国家や経済に屈従しているか、あるいは独立して活動しているかどうか、……ということである」。

戦後世界の枠組みはここにきて急速に揺らぎはじめ、時代の動きを的確に読みとることはむずかしくなりました。過去にそうであったように、未来においても歴史の流れが変わり、状況が逆戻り

して、世界が再び混乱のなかに投げ込まれるかもしれないという危惧の念を、捨て去ることもできません。わたくしが諸君にいおうとしておりますことは、おわかりいただけたのではないのでしょうか。国家や経済はそれじたいでは自由にも公正にもなりえません。国家の制度や経済を以前よりさらに自由にしいつそう公正にするのは、「独立して活動している人間の精神」にほかならないのです。わたくしはこの言葉を借りて、諸君に「精神の自由」の大切さを指摘しておきたかったです。わたくしたちになじみのある言葉で、「自由のうちにのおのずから秩序をたもち、あくまで節度をまもる独自一己の見識」と表現することもできるでしょう。

わたくしたち日本人は、東ヨーロッパの人びとが激動のなかで求めている自由をすでに手に入れております。わたくしたちの周りには、東ヨーロッパの人びとが求めているよりはるかにすぐれた生活物資が溢れております。それなのに、わが身を飾ることではか人生の楽しみを味わえなかった日本人がパリやニューヨークの街角で、人びとのマユをひそめさせております。質素な堅実さと自立心は、かつてわたくしたちの共通の理想でした。それはいまだこへいつたのでしょうか。東ヨーロッパの人びとが人間社会にあつてはならないものを拒絶し、あるべき姿を追い求めている切実な声に、わたくしたち日本人のどれほどの人が耳を澄まそうとしているでしょうか。

めざましい経済的成功の裏で、わが国の光と影の部分はますますきわ立ってきました。卓越した技術力と国際的孤立も、そのあらわれといえるでしょう。世界はこの大国日本に数々の疑問をもっておりまう。それらにどう答えるかは、わたくしたち日本人がどういう国をつくりたいと考えているかによつて決まるのです。苦痛をとまう自己変革なしには解決できない問題が国の内外に山積してあります。現にすすみつつある国際秩序の変化の本質をみきわめ、複雑な相互依存関係のなか

で生きていく知恵が求められているのです。それをはたかすのは精神の自由、すなわちものととをよりよき善に照らして選択する力であります。

本学での四年間、何はさておき、諸君のすべてがひとつの収獲だけは手にしたであろうことを、わたくしは確信しております。それは新島が本学設立に託したつぎの言葉につきております。「この大学よりしては、あるいは政党に加入する者もあらん、あるいは農工商の業に従事する者もあらん、あるいは宗教のために働く者もあらん、あえてあらかじめ定むべからずといえども、これらの人びとはみな一国の精神となり、元氣となり、柱石となるところの人びとにして、すなわちこれらの人びとを養成するは、実に同志社大学を設立する所以の目的なりとす。」新島のこの期待に沿うべく、諸君が本学での四年間に自分のものにした収獲をもとでに、存分の活躍をしてくださることを念願しております。

最後に、ひと言。これまでの諸君をはぐくんできたのは豊饒の海でした。大船に乗った航海は平穏そのものでした。しかし、諸君はこれから荒れ狂う海で、板ぎれのような小舟に生命を託することがあるかもしれません。全力を傾けて難局をのりきった後に、はじめて澄みきった青空の値打ちがわかります。古いロシアの格言があります。

神に祈れ　だが岸に向かって漕ぐ手をゆるめるな

諸君のご多幸とご健康を祈ります。

(同志社大学長)

人類の一員として

石田 章



同志社女子大学での四年または二年の学業を終えて新たな門出の日を迎えられた皆さんに、心から祝福の言葉を贈りたいと思います。卒業おめでとう。

人生に中断はありえないはずで、何かの完了は同時に別の新たな何かの始まりであるにすぎません。「卒業」を意味する英語の commencement という言葉はそのことをよく表わしています。卒業が祝福されるのは、二年あるいは四年の大学生活を終え、所定の単位を取得し無事全課程を終了したという、そのことにあるのではなく、むしろ、あなた方が、いよいよこれから、無限の可能性を秘めた、あなた方自身の未来に向って、新たな第一歩を踏み出す、そのことにこそ真の意味があるのです。今から百二十六年前、一人の青年が海外に向けて密かに日本を離れました。新島襄が、幕府の禁を犯して函館港から脱出したのは、彼の数えで二十二歳の時でした。あなた方と、ちょうど同

じ年頃のことです。その時、若き新島襄が抱いていたであろう、未知の世界への燃えるような憧れに、あなた方もいま一度想いを寄せて、果敢に、自らの信ずる道を歩んで行つて下さい。

現代は「女性の時代」だと言われますが、昨今の社会における女性の活躍ぶりは、まことに目覚ましいものがあります。女性の活躍の場は、さまざまな分野で、今後ますます広まっていくにちがいないと思います。特に、高齢化が急速に進む中で、高等教育を受けた優秀な女性の頭脳を、社会が一層強く必要とするようになるのは、時代の必然だからです。だが一方で、それだけに、女性に課せられる社会的責任も、今まで以上に重く厳しくなるにちがいません。「女性の時代」という言葉を、この数年来の社会現象がもたらした一種の流行語としてではなく、来るべき二十一世紀の担い手としてのあなた方一人ひとりの問題として、この「女性の時代」という言葉の重みを感じと受けとめてほしいと思うのです。あなた方が歩むその後に、あなた方を通して、一つまた一つと、新たな「女性の時代」の道ができるのだ、とそうに覚えて、自らを厳しく持し、力一杯、それぞれの道を歩んでいって下さい。

現代はまた、きわめて不透明で、不安に満ちた時代です。何時何が起こるか解らない。そしてわれわれ人類は、一步道を踏み誤れば、地球全体が破滅の時を迎えかねない、そのような危機的な時代に私たちは身を置いているのです。これからの私たちは、地球規模で物事を考え、あるいは人類全体に想いを馳せながら、自らの行動を律していく必要があります。それは決して大げさなことではなく、ごく平凡な日常生活の中での、私たち一人ひとりの、ささやかな心の持ちようの問題なのです。

さまざまな公害による環境汚染が、いま地球全体に深刻な危機をもたらしつつあるということは、

おそらく私たちの誰でもが知っていることです。けれども、その環境汚染への加担者が、他ならぬ私たち自身なのだ、という事実に対しては、私たちのほとんどが目をつぶり、黙して語ろうとはしない。公害は、いつてみれば、豊かさと便利さと裏腹の存在です。地球全体を覆う環境汚染の元凶の一つが、車の排気ガスであることは誰もが承知していますが、しかし、一方で便利な車の使用を止めることはまずしない。そこには、自分は別、自分一人くらいなら、という思いがあるからです。しかし、自分一人くらいなら、というその一人が、何億、何十億の集りになれば、結局は地球全体が公害促進に大いに手を貸していることになるわけです。あなた方の一人ひとりが、人類と社会の明るい未来に想いを馳せ、たとえささやかであっても、人類の一員として、それを実行する「良心の人」であるよう、心から祈ります。

あなた方が、これから足を踏み入れる社会は、決して甘い世界ではありません。厳しい茨の道が待ちかまえているでしょう。けれども、どんな苦しみに出会っても、めげることなく、一步一步、しっかりと大地に足を着けて、歩み続けて下さい。人間が耐えられないほどの重荷を、神は決してわれわれにお与えにはならないはずですよ。

患難は忍耐を生み出し、忍耐は鍊達を生み出し、鍊達は希望を生み出す。

（「ローマ人への手紙」第五章）

ご多幸と大いなるご活躍を心から祈ります。

（同志社女子大学長）